巻頭言

混迷する現代社会におけるウェスレ―研究の意義

野村　誠

戦後７０年、文化・経済・通信のグローバル化は著しく進み、世界は平和に向かっているのかと思いきや、戦火の絶えない、混乱と分裂の危機が増大しております。

UNHCR（国連難民高等弁務官）の発表によると、２０１４年末の時点で、世界中で約６０００万人、すなわち、日本の総人口の半数近くに当たる人々が、「内戦や治安悪化などによって難民や国内避難民などとして故郷を追われ、強制的に移動しなければならない状況に置かれています」。ローマ法王の言葉を借りるまでもなく、「私たちの人間性が試されている」重大な問題にもかかわらず、難民の受け入れをめぐって、混乱と分裂はさらに増していると言わざるを得ません。

昨年１１月１３日、パリにおいてテロ事件が発生して以後は、世界中でISへの恐怖が急増しています。罪なきイスラム教徒の方々をも巻き込む宗教対立ともなりかねない大小様々な事件が勃発し、日本への影響も心配されております。比較的良好だった中東との関係は、ISからあからさまに敵視されることで緊張を極め、「イスラム奪還宣言」に脅えて軍事政策に頼ろうとする声も次第に高まりつつあります。

サウジアラビアとイランの国交断絶・対立も、クルド人問題も、ロシアの

帝国主義も、混迷する EU 問題も、絶えず戦争の火種を内包していますが、日本人にとっては、中国の領土拡大政策や北朝鮮のミサイル発射の方が、もっと身近で切実な恐怖かもしれません。

戦後、何かにつけて目標としてきたアメリカ合衆国では、貧富の格差が、国民のわずか１０％の富裕層が国全体の９０％の資産を所有するほどに拡大・悪化しています（“Time”　January　25)。国民大半の不満が大統領選挙の行く末をも不透明にさせ、長年民主主義のお手本だった合衆国がこの問題にどう対処していくのか、世界から注目されています。自称「世界の警察」としての役割は終わったとしても、人権を尊重する民主主義国家として、良き手本を示してくれることを望みます。

こういう世界の中にあって、日本国内にも問題は山積しています。「少子化問題」「若者の非正規雇用の問題」「経済の低迷と膨張する国の負債の問題」「年金や医療・介護に代表される老人問題」などなど数え上げれば切りがありませんが、それに加えて、安保法案の可決後、「戦争に巻き込まれはしないか?」との不安を急増させている深刻な状況です。

さて、前書きが長くなりましたが、このように平和や安定した暮らしを続けることが難しくなってきた今日、「ウェスレ―・メソジスト研究」第１６号がここに刊行されることを僥倖に存じます。はじめは３号雑誌で終わるのではないかと心配しておりましたが、会員や賛助会の皆様をはじめ、諸先生方の御尽力やお祈りとお支え、そして尊い献金により、今日まで日本におけるウェスレ―・メソジスト研究の一翼を担う学会誌として力強く存続していることを心から感謝する次第です。

本学会の初代会長は、岩本助成先生です。岩本先生が基金を寄付して下さったお陰でスタートした本学会は、田添禧雄会長に引き継がれ、今日まで順調に発展することができました。

ご存知のごとく、ウェスレ―の神学自体はアングリカン（英国国教会）の伝統の中にありますが、アウグスチヌスをはじめ初代教会教父の思想を受け

継ぎ発展させながら、カトリック的な要素や東方正教会の神学やプロテスタントの伝統をも含んでおります。それ故、ウェスレー・メソジスト研究は、大変幅広い領域を含んでおります。

１８世紀の初期メソジズムは、サクラメント（聖餐式）の復興運動として、また野外礼拝における讃美歌復興運動として、さらに理神論（この世はすべて理性的法則に基づいて動いているという思想）に対抗する聖霊復興運動として始まりました。サクラメントを中心とするウェスレーの神学は、永遠の大祭司キリストが主体となった聖餐式の神学であるのではないかと思います。地上を旅する人間にとっては、「キリスト者の完全」を目指す聖化の神学でした。

注目すべきは、ウェスレーが活躍した１８世紀英国産業革命期は、極端に格差が広がった社会だったということです。人々の不安と不満は増大し、革命前夜の危機を孕んでいました。それを平和的に回避できたのは、ウェスレーとその仲間による慈善活動と宗教復興によるとみなされています。

刑務所や貧民街の訪問や日曜学校運動をはじめとする教育活動は、個人の救済に手を貸しつつ、社会全体の改善を促進させました。「料理のレシピ本」や「医療の啓蒙書」は、社会の問題を幅広く扱っていたウェスレーたちが、個人のみならず社会全体に訴えかける啓蒙運動の為に作ったパンフレットです。相互扶助によって格差を是正したり、宗教儀式によってキリスト教共同体を回復して英国社会の分裂を食い止めたり、「個人の魂」ばかりではなく「社会の組織」を救ったメソジズム運動の歴史的価値を私たちは再認識しなければなりません。

１８世紀のメソジスト教会では女性説教者が活躍していたという事実も、また、男女共同参画社会の先駆けとして注目に値します。

混迷する現代社会の諸問題の解決法を考える時、ウェスレー・メソジスト研究は、良きヒントと知恵を与えてくれるものと確信し、また、期待します。

本学会は現在、アングリカン・チャーチの伝統を引き継ぐ聖公会の先生方

との交流が図られています。学会誌の第１５号の特集では、「アングリカニズムとウェスレー」という題で協力し合いました。その結果、昨年の大会では立教大学副総長で日本聖公会中部教区司祭の西原廉太教授の主題講演が実現し、論文も掲載していただくことができました。

学会役員の藤本満先生は、ウェスレーについて東京神学大学をはじめとするいくつかの教育機関で教鞭をとって下さっております。このこともまた、ウェスレー・メソジスト研究の継承と発展に大きく貢献していることを感謝し、皆様にお伝えしたいと思います。

ウェスレー自身がそうであったように、私たちもまた、幅広い分野の人や文化と交流しながら、個人個人の幸福と社会全体の福祉の向上の為に、本学会を「温故知新」の場にしていけたらと思います。

最後に、今後、財政基盤も強められますようにお願い申し上げます。

（共愛学園前橋国際大学准教授・日本ウェスレー・メソジスト学会副会長）